

## 英語スクールサポーター

文学部 英語英米文学科  
教授 八日市屋多栄子

私がアメリカの大学に留学していた3回生の時だった。ジュニア・プラクティカムという実習のクラスを履修した。アメリカ・ミズーリ州にある小さな町、フェエットのカレッジでは教員免許取得希望者は3回生でジュニア・プラクティカムというクラスが必修であった。外国人の私が近隣の中学校へ週1回、1学期間通いチューター、いわゆるマンツーマンで、『英語』のクラスのサポートをするのであった。多分宿題を課せられてもやって来ない生徒であったのか。そばについていて勉強を見てあげる人が必要だったのであろうか。30年以上も前の事で記憶は定かではない。また昔の田舎町のアメリカと現在の日本とは事情がすっかり異なるかもしれないが、私はこのクラスのおかげで1年先の教育実習には全く不安を感じていなかったような気がしていた。

このような私は英語科指導法 III、IV を担当して以来4回生の教育実習の前の年の3回生が中学校、高校の現場で英語クラスをサポートする事は必要であると思っていた。しかし英語英米文学科3回生の教職履修者は授業がつまっている事もあり、全員がこれを体験する事は難しかった。けれども、ここ7年程は希望者は近隣の中学校で英語クラスのサポートをしてもらっている。

7年前の春、大学近隣の中学校で英米学科の3回生教職科目履修生が中学校2年生の英語クラスのサポートをさせて頂ける事になった。当時の学長の河上誓作先生が大学の役目の一つは地域貢献、皆でやれる事をやりましょう等と言われた頃の事。私は長年したかった事で、渡りに船と英米の学生が中学校の英語のクラスをサポートさせて頂けないかとの中学校の校長先生にお願いに伺った。

「3回生の英語英米文学科の学生が何かお手伝いさせて頂ける事があれば、させて頂きたい。翌年4回生で、教育実習に行く学生は中学生の英語をサポートさせて頂ければ私共の方もよい準備ができ、ありがたい」とお話した。英語担当の先生方と相談して下さり、夏休み前の補習から開始となった。

今も3回生の学生が主であるが、2回生、4回生の希望者にも行ってもらっている。中学校ではその年のサポーターを受け入れる先生を決められ、時間割の確定するのが4月の終頃なので、こちらではその頃までにボランティア学生を募集し、学生のボランティアの曜日、時間を決定し、原則的に毎週行ってもらっている。

初めの週には英語で自己紹介をして下さいと言われた事もあるようだが、主に授業の見学である。慣れてくるとペアレッスンに入ったり、先生と一緒にモデル会話を見せたりと、臨機応変に先生のアシスタントを勤めている。

先生によってオーソドックスな教え方や、最新の機器を使って授業をされる方もおられるが、学生はいろいろ見せて頂いてこういう風に教えればよいのだと思ったり、自然に自分ならこうしたいと思うようになるようである。朝の8時半から12時半までのスクールサポーターに行っている学生は時折クイズを採点もするし、リーディングの特訓を受けた事もあったという。学年の集会で挨拶を頼まれた事もあるという。いろいろ勉強させて頂けてありがたい事である。

ボランティア申し出の学生には事前指導に集ってもらい、服装、挨拶、その他のマナー、休む時等の中学校への連絡方法等を確認している。各自の初回中学校訪問日までに教員と一緒に学校へ挨拶に伺い、不安なくサポートできるように準備している。また1、2ヶ月に一度ほど、昼休みに研究室に集まり各自の担当クラスの報告をし合い、同じ事を教えても生徒の反応はクラスによってかなり異なる等の情報の共有につとめている。

2011年に3回生でこの中学校へボランティアに行っていた学生が翌年大阪府の中学校の英語教員に合格し、2013年度から現場で活躍してくれている。学生が地域に貢献しているというよりも学生の方が、いろいろ教えて頂き恩恵を受けていると思う日々であるが、もっと多くの学生が真にボランティア精神を発揮し、集まって来てほしい。地域の活性化に努めて欲しい、そして教員採用される学生も増えて欲しいと願っている。

## 考える力や議論する力を培う社会科教育

文学部 神戸国際教養学科  
准教授 野口和美

私の担当科目は、国際関係論、国際協力・援助政策論、地域開発論であるが、これらの科目の共通点は、国際的な要素を含んでいることである。講義の中で、昨今の国際社会における、貧困、紛争、環境汚染、感染症など多様な課題を取り上げている。それらにどのように対処するか考えるには、事実を正確に、自分の目で把握する必要がある。実際に、問題が発生しているホットスポットを自分の目で確認することが難しいので、授業では、理論に留まらず、現場のことを伝えるように努めている。東南アジア諸国の開発と光と影について、カンボジアでの著しい発展と歴史について講義をする際に、実際に訪問した際に撮影した人々や就労訓練のためコミュニティファクトリーで働く現地の女性へのインタビューなどを使用し、出来る限り、現場を伝えることも行っている。いつも現場に足を運ぶことは、頻繁にできないので、時には、現地で国際協力活動をしている方にご講義をしていただくこともある。

更に、授業で心がけていることは、理論を説明した後のグループ・ディスカッションである。国際関係論では、毎週、授業の際に、国際関係に関する新聞記事の切り取りを持ってくることを課している。実際に発生している国際的な事象について、履修学生を5人ほどのグループに分けて、新聞の切り取り記事の国際社会の課題についてディスカッションを行う。ディスカッションは、ただ、個人的なジャーナリスティックな意見を言う場で無いことを周知し、事前にその課題について調べることを課している。学生本人が調べることにより、その課題の本質や歴史的な背景を知ることが出来、その調べるという過程において、自分の考えを形成することが出来る。授業中に、学生自身に発表する機会を設けることにより、プレゼンテーション能力も高めることも出来る。

授業で課す課題についても、グループ・ワークを取り入れ、グループで国際的な課題や世界の国々について調べることを行っている。授業中においては、グループ内において、その課題について調べてきたことを話しあい、プレゼンテーションを行うことにしている。学生の視点で、興味深い国際的な課題を選んでおり、東南アジア、アフリカ諸国などが直面している感染症や環境問題など、幅広く、良い意味で、驚かされることがある。

本年度は、実際に、国際協力機構にて研修をしているアフリカやラテンアメリカ諸国の研修員の皆さんに国際協力・援助政策論の授業に参加していただき、学生と英語で世界のゴミ問題について話す機会があった。学生も、研修員の皆さんも、ビジュアル・エイドを使用して、一生懸命に説明をしていた。神戸市のゴミ回収方法の英語版を使い、説明をしている学生もいた。研修員の皆さんの出身国では、神戸市のように分別をしているところが少なく、今後、分別になることが理想であると話していた。

現在の国際社会では、ゴミ問題のように、多国間の連携なしには、解決し得ない課題が多く存在している。今後の社会科教育では、国際的な視野を取り入れ、国際社会の現場を含め、理論と現実との繋がりを考えながら、幅広い視野を持ち、議論する過程や考える過程を重視した社会科教育を実践できるように願いたい。

## 教職を志望する史学科の学生へ

文学部 史学科  
教授 中尾 友 則

先日、史学科の先生たちの間でこんな話がでた。教員採用試験の結果の出る時期が遅いので、それに向けてがんばった学生が条件の良い就職の機会を逃してしまっている、と。もちろん、史学科の学生の中から多くの熱心な先生が生まれることは大歓迎である。しかし、そのためにはかなり厳しい現実が横たわっていることも事実である。そこで、ここでは、教職を志望する史学科の学生に頭にいれておいてほしい現実的な問題について少し述べておくことにしたい。

まず、確かに、教員採用試験にパスできなかった場合、就職活動にはかなり不利になる。教員採用の一次試験は7月末から8月にかけて、その結果がでるのが9月（県によって異なるが）。二次試験の結果となると10月になる。その頃にはもう企業の就職採用試験は一通り終わっている。それだけでなく、6月頃に2週間あるいは3週間教育実習があるので、もし企業の就活を進めていて二次、三次試験がその期間に入った場合はあきらめざるをえなくなる（その期間に就活を始めることができないのは言うまでもない）。このように、教員採用試験の結果を待って就活を始める場合はもちろん、採用試験以前から就活に取り組む場合もかなり大きな制約を受けることとなるのである。

次に、史学科の学生が取得できる教員免許は中学校の社会、高校の地理歴史であるが、どちらの採用試験も合格することは容易ではない。社会科教員の採用試験は、教育学科や歴史学科だけでなく、いわゆる有名大学の法学部・経済学部など社会科学系学部の学生たちとも競争することになるからである。高校の教員は特に厳しいが、中学校にしても現役で合格する人は毎年一人いるかいないかというのが実情である。そのような狭き門であることは心しておかなければならない。

そして、教員という職業は決して楽ではないこと。筆者自身の経験からだけでもいくつもタフな事例を挙げることができる。授業がうるさくて成り立たない、廊下を自転車で走り回る、教員につかみかかる、休憩時間に教室で喫煙する、授業中にトイレで爆竹が鳴る、深夜に集団万引きの連絡が警察署から入る、校外で他校の生徒と集団で殴り合う等々。要するに、教員が相手にするのは身体と心をもった人間であり、それも、様々な家庭環境・友人関係等の中で大きく揺れ動きながら成長しつつある人間なのである。彼ら彼女ら自身が自分をコントロールできない場合も少なくない。厳しい現実に出遭うことも覚悟しておかなければならない。そのとき、あなたは、目をそむけようとするだろうか、それとも、何とかしなきゃ、と思うだろうか？

さて、以上のことを考慮して、それでもなお教員になろうという人は、ぜひ早めに一度教採の模擬試験を受けることをお勧めする。今の自分の学力はどの程度であり、合格圏内までどれくらいの開きがあるか、どんな領域が弱いかをできるだけ早く把握して、その不足を埋めていくための具体的な生活設計を立てるのである。いつ、どこで、どのように勉強するか等。なお、そのとき、同じ目標をもつ友人がいれば互いに力になれるのだが。

## これからの教員に望む

教職支援センター

岸本 芳信

最近の新聞等を見ると、教育委員会制度をはじめ、子どもの学力問題、いじめ問題、教員の資質向上、道徳教育、外国語教育…と、多方面にわたる教育問題が報道されている。また、新年早々、道徳と英語の教科化を含む学習指導要領の改訂が話題となっている。本稿では、今年の流行語大賞をキーワードとして、今後予想される多くの教育課題に対応できる教員となるための基礎的な内容を想定しながら、これからの教員の在り方について考えてみたい。

### (1) じえ・じえ・じえ：子ども達に関心・感動の心を持てる授業・指導ができる教員になりたい。

まず、子ども達に関心を持たせる授業です。せっかく一生懸命研究し、準備してきた授業です。教員の独り相撲とならないようにするには、子ども達が先生の話や授業内容に関心を持って臨んでくれるような場を設定することである。そして、授業の中で“じえ・じえ・じえ”という感動が一つでもあれば、子ども達はより興味を持ち、成長するはずである。そのために、教員が、日ごろから社会の出来事に関心を持ったり地域の様子を見たり地域の行事に関心を持ったりしておくこと、教員自身が世の中の出来事に興味関心・感動を持つことが必要である。

また、教員が、普段からこのような姿勢で子どもと接触するよう心掛けておくこと、子ども達の関心ごとを注意して観察しておくことが有効な授業構成に役立つ。教員が社会や地域の出来事を媒体とした、多くの興味関心・感動の心を磨き、子ども達との接触を心掛けることが、子ども達の関心・感動の心の育成に役立つと考える。

### (2) 倍返し：感謝の心を磨き、自らの経験を後世に返せるような人を育てる教員になりたい。

学生相手に面接練習や自己紹介書作成練習をしていると、教員を目指したきっかけとして、教えていただいた先生の話がよく出てくる。例えば、「友達間の問題の解決に、先生の指導姿勢が役立った。」「学校が嫌になりかけた時に、先生がやさしく相談に乗ってくださった。」「部活動で挫けそうになったときに、励ましたり指導したりしてくださり、立ち直ることができた。」等の内容がよく出てくる。多くの学生が、教員を目指したきっかけとして、教えていただいた先生の何かの正負の対応が大きく作用しているようである。

当然のことながら、先生以外の恩人等の話もよく耳にする。これらの人への感謝だけで終わるのではなく、次代につないでいく教員になってほしい。いや、感謝の心を“倍返し”することで、より人間関係が向上し、より心ある子ども達の育成につながっていくことになると思う。

### (3) お・も・て・な・し：人を大切にする心と行動力を育てる教員になりたい。

まず、日常生活で目の前の人に心をこめた対応を心がけたいものである。テレビのCMでよく見た光景であるが、人を助けたいという気持ちを持つだけでなく態度で示すことが求められていた。本学の皆さんには人を思いやる心を持った人が多いと感じている。この思いやりの心は、言葉にして表し態度で示すことで相手に伝わるのであるが、一般的にはなかなかうまく相手に伝えにくいものであ

る。この“おもてなし”の心で人と接することは、保護者や地域の人、教員との関係においてもよい作用をもたらしてくれるはずである。しかし、そう対応するには、自分自身の心の状態も重要な要素と思われる。常に、自らの心を安定させて、人を思いやる心、人を大切にする心、さらに、その心を態度で表す行動力が必要でしょう。日ごろから、素直な気持ちを相手に伝えるよう訓練しておきたい。

(4) 今でしょ：気になった行動は後回しにしないで、気づいたときにすぐできる教員になりたい。

さて、晴れて教員になった時、気が付いたときにすぐ仕事ができる教員が好まれる。教員という仕事は、これで終わりということがありません。いつ、どんなことが起こるかわかりません。いつでも子ども達に対応できるようにしておくことが大切である。それだけでなく、子ども達のわずかな変化にも目を配りたいものである。そのためにも、“今でしょ”の精神を大切にしていきたい。さらに、周囲の状況に気を配れる教員を目指してほしい。

さて、ここまでは、心の持ち方、考え方等についてみてきたが、次に、学生の皆さんが教員を目指して、これからどう対応していけばよいのかについて少し考えたい。

大学生になって、比較的勉強にゆとりが出てきた人が多いのではないかと思われる。しかし、今はやりの“ゆとり”になっては困るのです。ゆとりのある時間をいかに有効に使うかが、教員採用試験に合格するための、最初の課題である。皆さんには、大学生として当然の研究をはじめとして、ボランティア、アルバイト…と多くの事が待っている。そんな中で、採用試験に向けては、まず、一般教養、教職教養、専門教科という学力の問題がある。次に、人物評価に対応するために、面接、小論文、場面指導等の問題がある。いずれをとっても、これでよいという基準まで到達するには簡単なことではない。つまり、今すぐにでも、採用試験に向けての学習のスタートが必要である。

そして、よい教員になるためには、常に課題意識を持ち、日常の社会的出来事に関心を持ち、自分なりに考える習慣をつけておくことが大切である。そして、社会の出来事に敏感であること、つまり、普段からテレビや新聞のニュース等に気を配り、他の人の表現を良く見聞きするよう習慣付けたいものである。日頃から、自らの教育理念を確立し、教育に対する熱意を高める等、自己を磨いておくことが必要である。また、普段から「自己PR」「教育の今日的な課題や教育関連用語」「受験地の様子や求められている教師像」「児童生徒・保護者・地域・教師間等との信頼関係と協力関係」「教師としての力量と自ら目指す教育論」等の事項について考えをまとめておくことも重要である。

また、採用試験では、コミュニケーション力、実践的対応力、柔軟性、危機対応等が評価の対象となると想定される。普段からこれらの力を磨くよう生活するとともに、教育実習や学校ボランティア等で、いろいろな場面を見たり指導状況に注目したりして、「自分だったら」という姿勢で考えておくことが役に立つ。相手の立場に立った共感的な対応についても訓練しておきたい。実践的指導力については現役生にとっては経験不足からの不十分なところが多いので、教育実習や学校ボランティアの際に課題意識をもって対応し、教員の行動や対応等に注目しておくことが実践力を高めるのに役立つことになる。

魅力ある教員となるために、自らの持てる力を十分に発揮し、日々向上を目指して努力され、そして、晴れて採用試験を突破し、社会に巣立ってほしいと念願するものである。

# 教育実習の現状と課題

## —教育学科小学校実習のアンケートから—

教職支援センター  
大森 俊 昭

### 1 はじめに

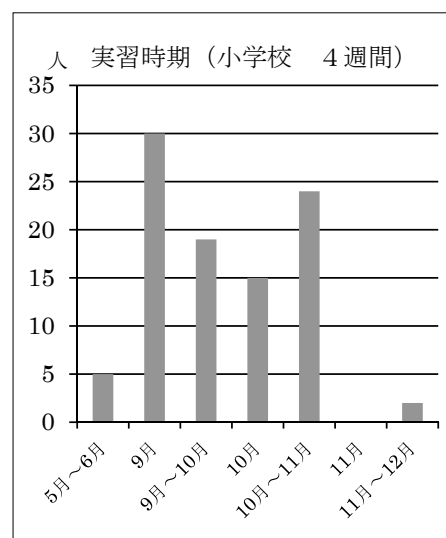
今年も教職課程を履修する学生が、その最終段階である教育実習を行いました。附属学校を持たない本学では、教育実習は、ほとんど学生の出身校園または地元教育委員会のご紹介による学校園で実施させていただいております。今年は、中学校・高校には91人、小学校には139人（栄養44人を含む）、附属幼稚園には80人、外部幼稚園には40人の合計350人が、それぞれの学校園の温かいご協力で教育実習を行い、大きな成果を得て無事に教育実習を終了することができました。ご指導いただきました各校園の先生方に心より厚くお礼申し上げます。

さて、この教育実習をどのように行うかは、受け入れ学校園の規模や実態、受け入れ方針等で大きく異なっています。また、実習生の考え方や取組み姿勢によっても、身につける資質や能力に大きな違いが出てきます。そこで、教育学科の小学校実習を行った学生へのアンケートの結果をもとに、教員としての資質を高める教育実習の在り方や、事前指導に必要な内容等について考えてみたいと思います。

### 2 教育実習時期 — 学校行事には積極的に手伝いを申し出よう！ —

一般に教育実習を受け入れる学校は、同時に複数の実習生を受け入れ指導する都合から、6月頃または10月頃に時期を限って実施しています。最近では、団塊の世代の大量退職による若手教員の増加で、実習を指導できる教員が減っているのに対して、教職課程履修希望者が増加していることから、受け入れ人数を制限している学校もあります。したがって希望通りの時期に実習ができない場合や実習受け入れを断られる場合も増えてきて、大学としても頭を悩ませているところです。

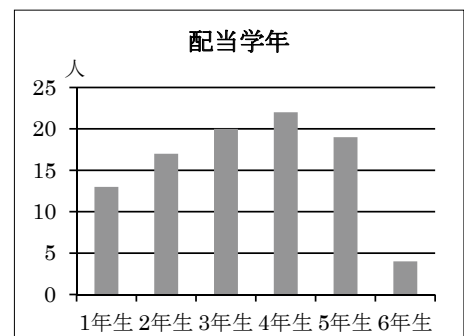
さて、各学校では、運動会（体育大会）や音楽会、文化祭、バス旅行、野外活動など様々な学校行事があり、この学校行事に合わせて教育実習を受け入れる学校と、これらの行事を避けて受け入れる学校とがあります。実習生にとっては、前者では、これまで児童生徒として参加していた学校行事に教師の立場で参加することができ、学校行事が綿密な事前指導や練習、教職員の協力によって実施されることを体験できますが、授業実習の機会が少なくなる傾向があります。後者では、学校行事の練習時間に妨げられることなく落ち着いて授業実習が行える利点があります。ただ、3～4週間の実習期間には、大なり小なり何らかの学校行事が実施されると思われしますので、その機会を積極的に活用して教師としての資質を磨きたいものです。



運動会の練習と教育実習が重なった学生は、児童の前でダンスの見本を見せたり演技の個別指導を行ったりしています。また、音楽会で得意な管楽器を児童と共に演奏したり、手話クラブに所属していることを生かして歌に手話をつける指導をしたりするなど、自分の特技を生かして積極的に取り組んだ学生もいます。特技はなくても、自分から積極的に手伝いを申し出て、教職員や児童生徒と共に学校行事を作り上げる喜びをぜひ体験してほしいと思います。大学としても、事前指導等において学校行事への関わり方を具体的に指導しておく必要があるでしょう。

### 3 実習学年 一学年ごとの児童の発達を理解して臨みましょう！一

教育実習でどの学年を担当するかは、ほとんど受け入れ校の事情によって決められます。学校によっては、低学年、中学年、高学年というように、実習生の希望を聞いてくださるところもあるようですので、事前に児童の発達等を研究して希望を考えておくといいでしょう。



小学校では、高学年になるにつれて学ぶ内容は高度になり、それまでの学習の積み重ねによる学力差も大きくなるので、教材の系統や関連などを調べるなど教材研究も深くする必要があります。

また思春期にさしかかり、児童への対応も難しくなります。ただ、5年生は自然学校や野外活動があり、若い教師の手助けが必要となるので、配当される場合も多いようです。小学校では、6年間という大きな発達の違いがあることを意識して、事前に配当学年の児童の発達について理解しておくことも必要になってきます。また、講義でも児童の発達について具体的に指導したり、模擬授業等でも低学年、中学年を中心に実施するなどして、事前に少しでも児童を理解できるようにしておく必要があります。

### 4 実習授業 一自分から積極的に申し出て、様々な授業を体験しよう！一

教育実習には、観察実習、参加実習、授業実習の3つの段階があります。

#### (1)観察実習

観察実習は、実習生が教師と児童・生徒の外にあって、第三者的な立場で教育活動全般について観察し、児童・生徒の実態を正しく把握して、教育実践への手がかりを得るのがねらいです。授業はせずに、観察の目的や観察事項を選び、大学で学んだ心理学や教育学などの知識を応用して、教師の動きや児童・生徒の活動の様子を記録・分析などを行います。実習の前半はほとんどがこの観察実習に充てられます。授業参観で学んだことを分かりやすく整理し記録しておくことが大切で、自分なりの実習ノートや授業記録を工夫すると良いでしょう。

#### (2)参加実習

参加実習は、観察によって得られた知識を基に、指導者の指導を受けながら、助手的な立場で教育活動に参加するものです。観察より一歩進んで教育活動に入り込み、児童・生徒と直接接触して教育活動の一部を担当したり、教材、教具、資料等の準備をしたりするなど、補充的な役割をこなします。



また、学校行事やクラブ活動等に参加して教育活動の体験を重ね、教育活動の実践的な理解を深めることもできます。

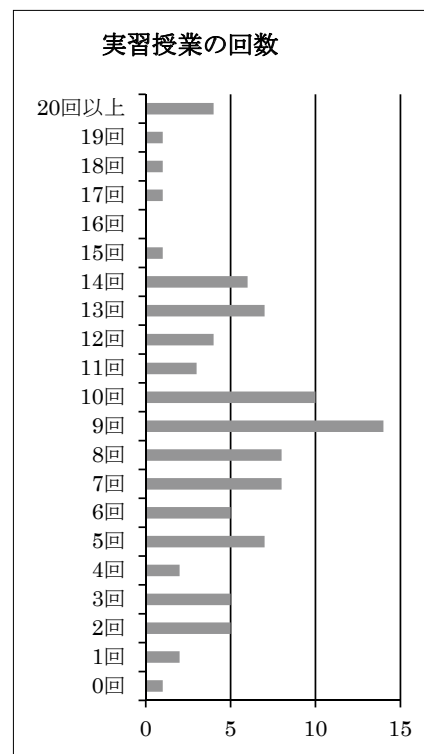
アンケートでは、参加した回数は0回～60回まで幅がありますが、机間指導やノート指導、朝の会の指導、運動会練習など様々な参加の仕方をしています。積極的に「手伝い」を申し出て、経験を重ねるとともに、参加する教育活動の意義をよく理解して行うことが大切です。

### (3) 授業実習

授業実習は、教育実習の中でも最も重点の置かれるもので、実習生が一人で1時間を責任をもって授業するものです。指導教員の指導に従い、観察や参加による児童・生徒の理解の上に立って、指導目標の設定、教材研究、指導計画の立案、指導の展開計画（板書、発問、指導の工夫等）を立て、学習指導案を作成し、実際に授業を行います。

授業実習の回数を見ると、0回～20回以上まで大きな開きがあります。回数が少ない人の中には、学習指導案の作成に対して指導教員から細かく指導を受け、何度も書き直して内容の濃い実習授業した人もあります。

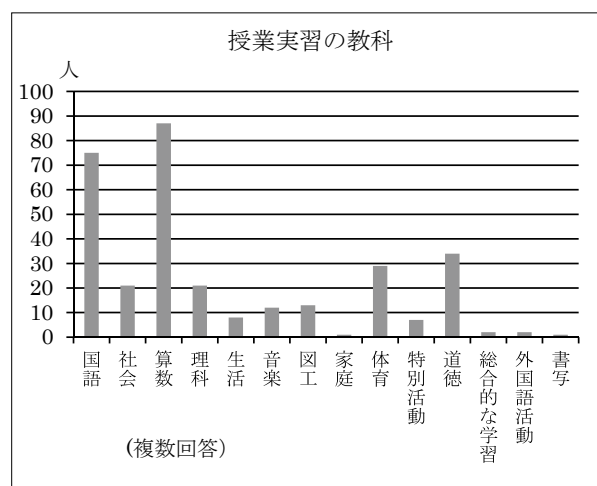
一方、授業回数が多い人の中には、指導案なしで授業をした人もいます。指導教員が「指導案なしで良いから……」と実習生の負担を考慮してくれたようです。しかし、未熟な実習生が指導案なしで授業を行うのはあまりに無謀で児童生徒に申し訳なく、せめて指導略案だけでも書いて取り組む誠実さが必要だと思えます。



回数を多くすれば良いというものではありませんが、回数を重ねることによって児童生徒への対応や授業の進め方などにも慣れ、落ち着いて授業ができるようになると思います。授業実習の回数は決められていませんが、許されるなら、10回程度は経験してほしいと思っています。

### (4) 授業実習の教科

右のグラフは、小学校実習で実習生が1時間授業を任された授業実習の教科別の人数です。95人の実習生のうち算数が87人（91.6%）、国語が75人（78.9%）と圧倒的に多く、ほとんどの学生が経験していると言えます。また、教育実習の仕上げとなる研究授業でも、算数を実施した学生が突出しています。算数は指導する内容が明確で、児童も「分かった」「できた」と自己評価できるので、実習生としても成否が把握しやすく、授業実習として適しているのだらうと思います。



実習生の中で、指導担当の先生の指導で、算数の1単元をすべて任された場合があります。算数の知識・技能は、その学年で学んだことが次の学年の基礎・基本になっている場合が多く、その知識・技能を活用して新しい知識を発見するという学習もあります。実習生がかなりの力を持っていたから任されたのでしょうか、全ての児童に確かな学力をつけさせるためには、一単元丸々を授業する責任は、実習生には重過ぎるのではないかと考えます。

また、授業実習が算数だけという学生も数人います。教科の学習指導はそれぞれの特徴があります。学生の指導力の有無もありますし、全ての教科を経験することは無理だと思いますが、できればいくつかの教科の授業を経験してほしいと思います。また、できることなら、道徳も授業させてもらえたらと思います。それは、指導すべき道徳的価値について、実習生自身が、児童の実態を捉え、教師として児童を「こう導きたい」という熱い思いを持って授業に臨む経験をさせてやりたいと思うからです。学生は、授業実習の希望を尋ねられれば、自分から積極的に申し出て、出来るだけ様々な授業を体験してほしいと思います。

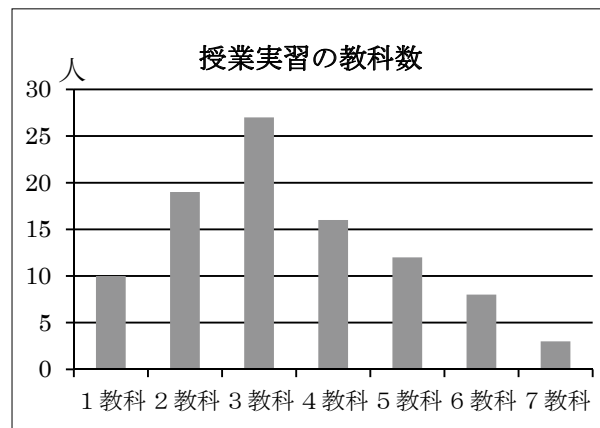
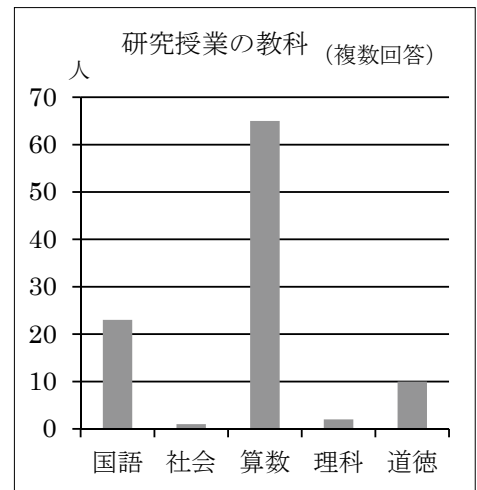
小学校における授業実習の教科の実態から、大学の教職課程のカリキュラムも考え直す必要があると考えます。算数についての講義は、「算数概説」「算数科教育法」が1回生となっており、2回生以降で学習指導の基礎的な授業力がつく前に算数が終わっていることになります。実習授業でも算数が多いことから、教育実習を行う3回生には、算数の指導力を高めるためにも算数の教材研究や学習指導法を事前に学ばせるのが良いと考えます。

## 5 困ったことや苦しかったこと — 子どもへの対応の仕方をしっかり学んでおこう！ —

教育学科の学生は、これまでスクールサポーターとして学校現場に入り、先生方や児童と関わった経験がある者が多いと思われませんが、実習生として教師の立場で学校現場に入り、改めて教師の仕事の難しさや苦しさを知ります。

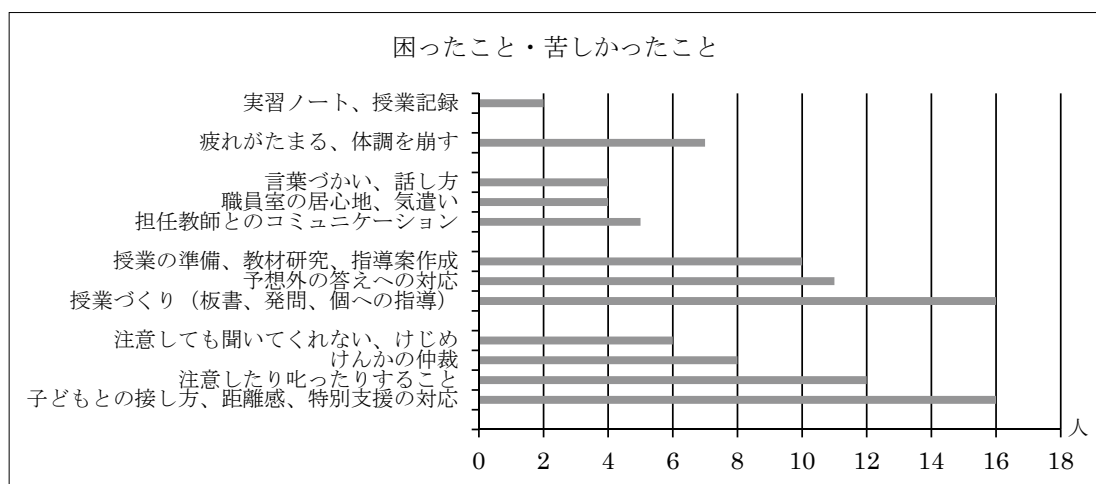
次の表はアンケートの記述から、困ったことや苦しかったことを集約したものです。やはり、子どもへの接し方や注意の仕方、叱り方など、実習生ならではの苦労があるようです。「先生」ではなく「お姉さん」になってしまったとの反省もあります。

叱ったり注意したりすることは、ベテラン教師でも難しいものですが、子どもとの関わり方は、大学ではいつどの講義で学んでいるのでしょうか。心理学や生徒指導などの学びを生かして、具体的な事例



研究やロールプレイなどをしながら、具体的にその技法を学ぶ必要があると思います。

また、授業作りや教材研究、授業準備も大変な苦勞だったようです。授業実習するようになって、学習指導案作成や授業準備に深夜までかかり睡眠時間が少なくなってしまう学生もたくさんいます。大学では模擬授業のために指導案を書き準備をしますが、実際の児童生徒が見えていないため、適当なところで済ませているように思います。指導案の一つ一つを個別に丁寧に指導してもらうことも少なかったのかもしれませんが。受け入れ側の学校の意見でも、指導案作成の指導を大学でしっかりやってほしいとの要望もあがっています。教材研究や学習指導案づくり、学習指導法等について、その基礎・基本や実習、演習を教職課程でどのように体系的に指導していくか再検討する必要があります。

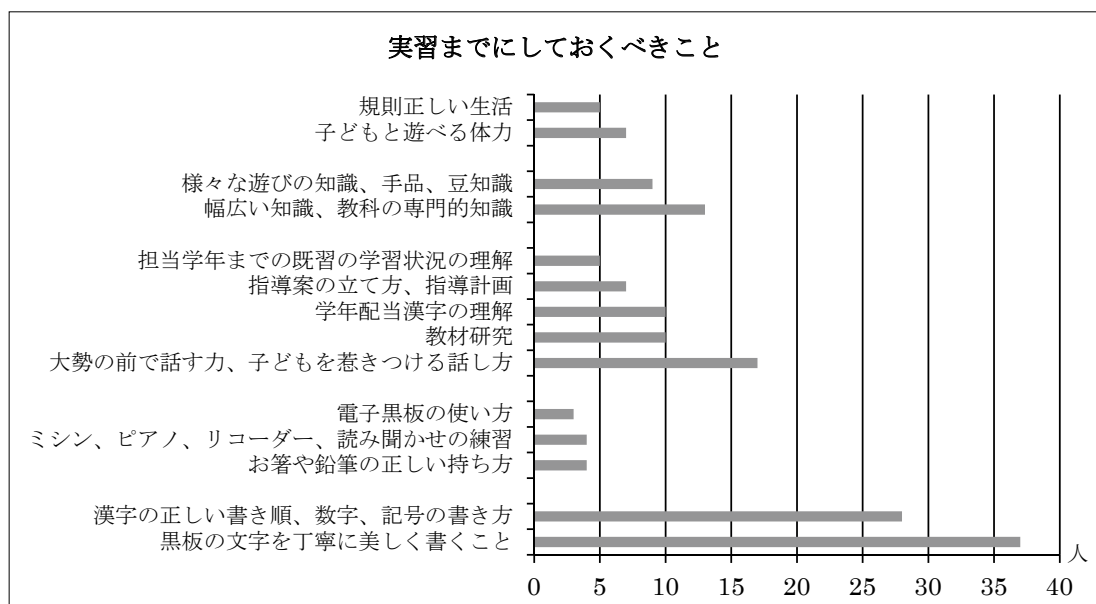


## 6 教育実習までにしておくべきこと —先輩のアドバイスを自分に当てはめしっかり準備しよう！—

実習生に、「教育実習を振り返って実習までにしておけばよかったこと」を尋ねると、多くが黒板に書く文字やプリント等の文字の拙さをあげています。また、漢字や平仮名の筆順、数字や記号の書き方の間違いを指導教員や児童生徒に指摘され恥ずかしい思いをした者も多くいます。箸や鉛筆の持ち方を指摘された者もあり、教師として学校現場に立って指導するためには、児童生徒のモデルとして正しい持ち方や書き方ができるようになっていなければならないと考えます。

そういう意味では、これらのことは学生任せにするのではなく、教職の授業として行う必要があるのではないかと考えます。また、教材研究の仕方や教科の専門知識、子どもを惹きつける遊びや話題、子どもと一緒に遊べる技能などを学生が身につける機会も必要ではないかと考えます。

さらに、早寝早起きの基本的な生活習慣や体力が必要という答えも多いです。この3～4週間の教育実習でも、教員として早朝より夜遅くまで勤務をして体調を崩した者もかなりいるようです。事前指導の際にも、基本的な生活習慣や体調管理、基礎体力などの項目を忘れず指導することが必要だと考えます。



## 7 おわりに

教育実習は、学生にとっては大変厳しい体験でありながら、一方、大変印象深い体験となっています。学級担任でも子ども達にしてもらったことが少ない「お別れ会」を開いてもらって感激して、教職への思いを強めた学生もたくさんいます。また、実習生として児童生徒と学校生活を共にする中で、児童生徒からの信頼を得て、学習意欲の向上や心のケア、生徒指導等に寄与し、学級担任から感謝され、教師のやりがいを感じた学生もいます。教育実習を機に、教員採用試験合格に向けての勉強の意欲も高まってきています。実習校の校長先生をはじめ指導教員の先生方や多くの先生方にお世話になり、また、児童生徒との交流を通して、改めて「教育は人なり」を実感したことと思います。教育実習は、教員志望の学生をひとまわりもふたまわりも大きく成長させてくれました。

実習が終わり、しばらくしてスクールサポーターで小学校に行くと、実習に行く前とまったく違った視点で授業を見ることができるようになっていました。担任の先生が学級経営のために工夫していることをいいなと思えば、メモを取ってまねをしようと思ったり、今のはこう言った方が子ども達の後の作業がうまくいったらうな、などと考えたりできるようになりました。今後は学校現場に行く機会がスクールサポーターしかないので、いろんな視点で見ていき、積極的に自分に取り入れていこうと思いました。

(実習ノート「実習を終えて」より)

4回生の後期には、これまでの教職課程の学修を振り返って、教員として不足している部分を補ったり実践的な指導力を身につけたりする必修科目「教職実践演習」が新設されています。教育実習の成果を踏まえて、卒業後の教職を見据えて更に教師力を磨かせたいと思っています。今後も、教育実習を実のあるものにするためにも、教育実習の課題を一つ一つ検証して、事前指導、事後指導、そして集大成とも言える「教職実践演習」を充実させ、教員として本当に必要な知識や技能をしっかりと身につけさせることのできる教職課程にしなければならないと考えます。

# 日本地理かるたを活用した「社会科概説」の授業

文学部 教育学科  
准教授 佐藤 浩樹

## 1 はじめに

小学校社会科に関する教職関係の科目は、教科専門科目「社会」（以下「社会科概説」）と教職専門科目「社会」（以下「社会科教育法」）とがある。このうち、「社会科概説」の内容構成論についてはスタンダードが存在せず、小学校社会科教員養成教育における大きな研究課題の一つとなっている。筆者は、教科専門科目の授業は、教科の学問的・専門的内容に触れながら、小学校における教科の基礎的知識・技能を身に付けるとともに、授業方法・授業づくりへの示唆を与えるべきものであると考える。そのため、「社会科概説」の授業（2回生前期）を、小学校社会科の専門的内容について模擬授業形式や演習形式を取り入れて講義するとともに、小学校社会科を教える上で必要な基礎的知識・技能を身に付け、「社会科教育法」（2回生後期）において学生が行う学習指導案作成や模擬授業へつなげるようにシラバスを構成し、実践を進めるようにした。

一方、受講学生の社会系科目に対する実態をみると、平成10年版学習指導要領で中学校社会科地理分野の学習において方法知が重視されていたため、日本や世界の諸地域についての知識が不十分とされる世代の学生である上に、高等学校での地理の履修率が極めて低い傾向にあった。地理の基礎力確認のために実施した地理能力検定5級（小学校卒業レベル）で高得点をとる学生がいる反面、合格ラインの正答率70%を下回る学生も多く、地理的な知識・技能について大きな課題があるといえる。

そこで取り上げたのが「日本地理かるた」である。「日本地理かるた」（全国地理教育学会編2010）は「都道府県かるた」の一種で、社会科系、地理系の授業での活用が期待されて作成されたものである。我が国には数種の「日本地理かるた」が存在するが、最も優れた都道府県かるたといえるものであり、筆者は小学校5年生の社会科授業で「日本地理かるた」を活用した実践事例を報告している（佐藤2012）。今回の「社会科概説」の授業は、その実践をもとに構成したものである。平成25年度前期「社会科概説」15回の授業の中の地理的内容（3回分）において、「日本地理かるた」の活用し、教科の専門的内容に触れながら基礎的知識を身に付け、授業づくりへ発展する授業を試みた。

## 2 日本地理かるた活用の意図と授業の概要

実際の授業では、「日本地理かるた」競技を実施した上で、かるたの札から各地方の特色を発見させる学習活動、かるたの札をもとに都道府県新聞を作成し、発表・交流する学習活動を行った。「日本地理かるた」をこのような扱い方で活用したのは、以下の理由による。

平成20年版小学校社会科学習指導要領3,4年の内容に「47都道府県の名称と位置」が新設されたことから、「日本地理かるた」は教員養成教育の教材として大きな価値を持つと考えられる。小学校、高等学校での実践事例を見ると、大学生でも「日本地理かるた」に対する興味関心は高いと予想され、楽しみながら、人間的な触れあいの中で都道府県に関わる知識を学べるかるた競技を体験することは意義

があるものである。しかし、小学校社会科学習指導要領は、「都道府県の名称と位置」しか取り上げないという大きな問題点を持っている。筆者は、「都道府県の名称と位置」だけでは不十分で、各都道府県の特徴や各地方（7地方）の特徴といった学習内容に発展させていくことが必要だと考えており、この点から「社会科概説」の授業では、競技体験にプラスして都道府県や各地方の特徴といった内容を取り入れることとした。これは、学習指導要領社会科カリキュラムの問題点の改善を意図しての扱いであり、日本地理に関する内容が教科専門科目「社会」の中心的な内容の1つとなるであろうという考えに基づいてのものでもある。また、かるた競技の実施から都道府県新聞作成、発表・交流という流れが、社会科の単元づくり・授業づくりにつながることも意図して授業を構成した。

### 3 「日本地理かるた」競技の実際とアンケート調査結果の考察

「日本地理かるた」競技は、地理的内容第2回の後半と地理的内容第3回の前半に合計2回実施した。4人1グループを基本とし、2回目は1回目のグループ内順位をもとに対戦メンバーを変更した。

学生の多くが「予想以上に盛り上がり楽しかった。」「白熱して楽しかった。」「久しぶりにかるたをやってとても楽しかった。」「思った以上に子ども返りして素直に楽しめた。」等の感想を書いており、「日本地理かるた」競技は学生に大変好評であった。



「絵を見て札をとるのですごく興味がわき、この絵は何県のもので名前は何だろうとか、調べてみたいと思うところがたくさんあった。」「自分の知らなかった県の特徴を知ることができて興味がわいたし、行ってみたいと思う県もできました。」等の感想も多く、大学生でも「日本地理かるた」競技が、都道府県への興味・関心を高めたことがわかる。

また、「かるたの絵や文を見たり聞いたりして楽しみながら県の印象が頭の中に残った。」「かるた取りを何回もしていくうちに県の特徴を知っていけそうな気がした。」「繰り返しかるた取りをすることで県の特徴を覚えることができるので小学生には有効だと思った。」「遊び心もありながら地理も覚え、印象的なもので特徴を捉えることができるのでよかった。」「かるたで覚えながら体で感じるできるのでよいと思う。」等の記述からは、「日本地理かるた」競技が都道府県の特徴を理解するのに有効であると感じていることがわかる。

競技を楽しみながら、人間的な触れあいの中で、都道府県への関心を高め、絵と言葉から都道府県の特徴を印象深く理解できるという「日本地理かるた」のよさを大学生が実感として感じていると言える。大学生がこのような体験的な学びをすることは大変意義あることが確かめられた。

### 4 「都道府県新聞」作成の実際とアンケート調査結果の考察

一回目のかるた競技の後、以下のような「都道府県新聞」作成の課題を出した。



- 1人1つの都道府県を取り上げ、都道府県の特徴を伝える新聞を作る。
- A4判コピー用紙1枚にまとめる。
- 新聞タイトルは、「○○県新聞」でもよいし、別の題を工夫してもよい。
- 日本地理かるたの札（のコピー）を貼り、内容の解説をする。
- かるたに読まれた以外の県の特徴も調べて紹介する。
- 全体としてどんな都道府県かをイメージできるキャッチフレーズをつくる。
- イラストを描いたり、色を付けたりして紙面構成する。
- 作成するために調べた資料を下の方に記す。インターネット以外の資料も活用して調べられればよい。
- 学籍番号と名前（発行者）を記す。

学生から作成時間が2週間ほしいという要望があり、地理的内容第3回では日本の地方区分、地方の特色、日本の地域構造について講義し、作品の発表は地理的内容第4回で行った。4人グループに分かれ、発表と質疑とを合わせて1人約5分の持ち時間で発表を行い、全員の発表が終わった後、代表者3名が全員の前で発表した。学生は都道府県新聞づくりの課題に熱心に取り組み、立派な作品を作った学生が多かった。調べたことをまとめてビジュアルに表現する力は大変高いように思う。

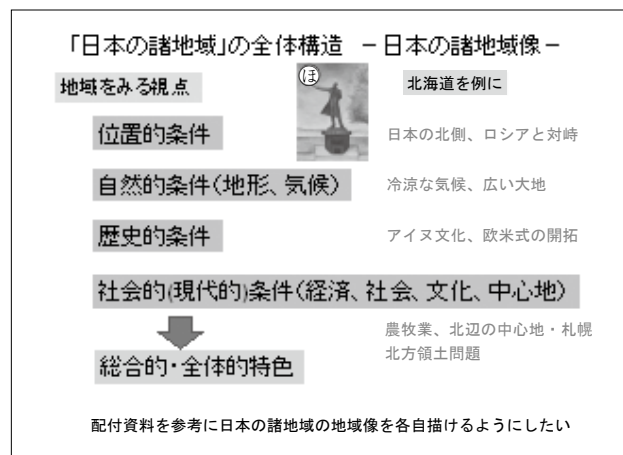


都道府県新聞づくりについての学生の感想は、「都道府県新聞づくりはその一つの県を集中して調べられるので、新しい発見があったり、調べているうちにもっと調べたいと思いました。」「子どもの頃の気持ちに戻って新聞を作ってみてちょっと懐かしかったし、新たに知ることがたくさんあり充実して

いた。」等、「よかった」「ためになった」というものがほとんどであった。また、「調べた情報をどのように新聞としてまとめるのが大変でした。どうやったら上手にまとめられるのだろうと一番考えました。」「もう一回り大きな紙で作りたいかった。描きたいことが調べれば調べるほど出てくるので。」という感想もあった。発表・交流については、「グループでその土地についての知識を確かめ合うことで自然と頭に入り、社会の勉強が好きになりました。」「他の人の発表を聞くのもとても楽しかったので社会が好きになる子どもも多いのではないかと思った。」「みんなそれぞれに調べてまとめたので、まとめ方や書き方が参考になりました。」等、内容と方法の両面から学んでおり、この活動を評価している学生が多かった。都道府県新聞作成・発表の活動は、興味・関心の喚起、知識の獲得、効果的な表現方法、よさの認め合い等の面で意義ある活動であったと言える。

課題としては、web ページ以外でも調べるように指示したが、本を使って調べた学生が少なかったことがあげられる。web ページを中心としながらも他の資料も活用させるようにすることは課題であろう。

また、アンケートの中に、小学生に新聞を作らせるならば、もう少し的を小さくし、ある程度決められた内容を新聞にまとめる方がよいのではないかという指摘があった。学生の作成した新聞の中にも、位置や自然、歴史等にはあまり触れていない観光案内的なものも見られ、的確な指摘であった。次時の地理的内容第5回の最初に、自然条件等をきちんと取り上げている作品をよいモデルとして紹介し、「日本地理かるた」の北海道の札を使って、都道府県、各地方の特色を捉えるには、位置的条件、自然的条件、歴史的条件、社会的条件が重要であることを補足した。





## 5 おわりに

「日本地理かるた」を活用した授業全体を通じた感想としては次のようなものがあった。「かるた取りでまず日本の都道府県に興味を持つことができました。そして、それを新聞づくりに発展させていくことで1つの県のことを深く知れたし、発表し合うことで友達と情報を共有できる。単純に都道府県を覚えるよりもずっと有意義な時間を送れました。」「かるた取りをすると競争心が高まり集中するから自然と特色等が頭に入ってくるし、新聞づくりで実際に調べたりできるからとてもよいサイクルだなと思いました。これだと子どもたちの頭に入りやすいと思います。」

日本地理かるたを活用した「社会科概説」の授業は、教科専門科目であるが、教科内容に重点を置きながらも、かるた競技→各地方の札の特色→都道府県新聞づくり→発表・交流という小学校の授業を想定した構成で授業を行った。先の感想のようにその点を評価している学生もおり、教科専門科目「社会」のあり方に対する1つの提案になったと考える。

「日本地理かるた」は、小学校社会科教員養成における教材として大変価値があり、それを活用した授業によって小学校社会科カリキュラムのあり方を考えるとともに、小学校社会科の基礎である都道府県認識への関心を高め、小学校社会科地理的学習の教材活用や授業づくりへと関連させられることを明らかにした。これからも、教科の専門的内容に触れながら、教科の基礎に対する知識や関心を高め、教科の授業づくりへ発展する「社会科概説」の授業の充実に努めていきたい。このことは、実践的指導力の育成とともに教員採用試験に向けての基礎力向上にもつながるものであろう。

### 【参考文献】

今井英文「日本地理かるたを活用した高等学校の授業実践」、地理教育研究第8号、pp.48-53、2011.3  
佐藤浩樹「日本地理かるたを活用した小学校社会科の実践」、山口幸男編『地理教育・社会科教育の理論と実践』（古今書院）、pp.121-132、2012.2

全国地理教育学会日本地理かるた制作委員会「日本地理かるた（都道府県編）制作の中間報告」、地理教育研究第5号、pp.47-50、2009.10

山口幸男、佐藤浩樹、今井英文、原口美貴子「教員養成教育における日本地理かるた（都道府県かるた）の活用－小教専「社会」を中心に－」、日本社会科教育学会全国大会発表論文集第9号、pp.76-77、2013.10

# 問題行動の早期発見と効果的な指導

文学部 教育学科

助教 谷山 優子

## 1 問題行動についての理解

教員は授業を通して児童生徒の学力の向上を図るのが主な仕事であると思われているが、実際は学校内外で起こる問題行動の指導に多大な時間と労力を費やしている。授業中大声を出して騒いだり、相手に暴力をふるったり、ルールやマナーを平気で破ったり、また学校外においても、触法行為をしたり、たむろして夜も帰宅しないといった児童生徒の問題行動を教師は粘り強く指導していく。問題行動といえば、このような暴力や暴言、器物損壊、授業妨害、けんかやトラブル、家出、深夜徘徊、触法行為といったものをさすように思える。しかし、学校生活になじめず、友人もほとんどなく、学業生成期は悪くないが目立たないといった児童生徒にも問題行動の要因が潜在している可能性がある。また、友人とうまく関わらず、いじめられたりいじめたりして、自信をなくし不登校になるという問題行動に発達障害の特性が関係していることがよくあるということが最近注目されている。児童生徒一人一人は、それぞれ発達の程度が違い、家庭環境が違い、性格や能力も違う。特に思春期は、心身が不安定になりやすい激動の時期である。親や教師より友人からの影響も非常に大きくなる。そのような中で、権威への反抗や一過性の反社会的な問題行動をとることもある。教員は、一人一人の児童生徒にあらゆる問題行動の要因が潜んでいると考え、集団全体を指導しながら、個別に抱える問題の改善に取り組んでいかねばならない。

## 2 問題行動の早期発見

問題行動として顕著に現れてくる前に、児童生徒はサインを発していることが多い。日頃から、子どもの様子をよく観察して、以下のようなサインを見逃さないことが肝要である。

- 基本的な生活習慣の乱れ、規範意識の低下
  - ・ 服装、頭髪、言葉遣いの乱れ
  - ・ 早退、遅刻、無断欠席、居眠り、無気力
  - ・ 菓子類、携帯の持込
  - ・ 授業・係活動・部活動等の意欲の低下
  - ・ ごみ・落書き、プリント類の破棄
- 人間関係の変化
  - ・ けんか、いじめ、いたずら、けがの増加
  - ・ 遊び仲間の変化、夜間徘徊、たまり場、金銭トラブル
  - ・ 親や教師への反抗
  - ・ 異性を意識した不適切な言動

同時に、一人一人の児童生徒との面談やアンケート調査を定期的にまた必要に応じて行うなどして、

学校や家庭での生活や交友関係に悩みや不安がないか、いじめはないかなどの把握に努める。

教員は学校全体として児童生徒の理解に努める。廊下ですれ違った児童生徒が浮かない顔をしていないか、数人でじゃれあっているように見えても心から楽しく遊んでいるのかさっと観察するようにする。学級担任はもとより、教科の担任や養護教諭、部活動の担当など直接子どもに関わる教員は気軽に声をかけられるし、子どもも自分が心を開きやすい教員に悩みや不安や困っていることを打ち明けられるよう、すべての教員が連携して指導に当たる。学級担任を中心に、気になる子どもについて気づいたことや有効な支援があればこまめに情報交換し、できるだけ早く問題行動のめばえを把握する。ただ、学校外の子どもの様子についてはわかりにくい。他校生徒と一緒に地域の公園や商店街等で問題行動を起こしていることもある。PTAの保護者や地域の人々に気軽に児童生徒の様子を教えてもらえるよう日頃から連携し、ネットワークを築いておくことで問題行動を早期に把握できる。また中学校、高等学校でも問題行動の原因が小学校段階で予兆がある場合もあるので、個人情報に十分留意しながら、幼稚園・保育所（園）・小学校・中学校・高等学校間で定期的に情報交換する協議会を持つという取り組みで効果を挙げていることが多い。

学校は、校内で教員がチーム力を発揮し、子どもをよく観察し、問題行動の早期発見に努めることはもとより、関係機関や地域社会の持つ機能を有効に使いながら、より効果的な問題行動の指導や未然防止を図ることが肝要である。

### 3 問題行動を起こした生徒への効果的な指導の進め方

先に述べた問題行動のサインが見られたら、即座に指導と支援・援助を行っていくのだが、特に暴力行為や喫煙といった問題行動は、時期を逃さず毅然とした指導をすぐに始めなければならない。まずは、事実確認を行う。関わった児童生徒を特定し、それぞれ一人ずつ別々の部屋で同時に事実確認をし、聞き取った事実を正確に把握し教員が共通理解する。そして、心からの謝罪や行動の反省について指導し、保護者への丁寧な説明、適切な関係機関との連携といった措置を速やかに進めていく。これは同じような問題行動を繰り返させないために不可欠である。それでも、同じ児童生徒にこのような指導を繰り返すことが多く、熱意のあまり「何度言ったらわかるんだ」といらだつこともあるだろう。しかし、教員は子どもを「信頼しているよ」というメッセージを粘り強く与え続ける。このことが問題行動を起こす直前の抑止力となって働くことがあるからである。と同時に、自らの将来に希望や目標を持って、学校生活を生き生きと送ってほしいという生徒指導の本来の意義から、つまづいているところの学習指導や疎外感を抱かせない学級作りを進めていく必要がある。問題行動のある児童生徒が学校生活を充実したものであると感じるためには、やはり「勉強がわかる」「居場所がある」と感じるということがとても大切である。ただ、学校だけで児童生徒がよりよい充実した学校生活を送れるような指導ができるわけではない。保護者の協力があってこそ、両者でそれぞれの役割を果たしながら指導を進めていくことが可能になる。問題行動を繰り返す子どもの保護者は、度重なる学校からの連絡に「またか」と不信感を学校に向ける傾向がここ最近強い。このことが、生徒指導を困難にしている現状が見られる。子どもが問題行動を起こしたことを保護者に伝える際には、把握し得た事実を正確に伝えること、そして保護者を責めず、子どものために学校は保護者と一緒に取り組みたいのだという姿勢を理解してもらうことが重要

である。そのためには、電話では感情の行き違いが生じることが多いので、家庭訪問をするなり、来校してもらったりして、顔を合わせて丁寧に状況を伝え、保護者の気持ちも受け止め、子どもが学校生活を楽しく送れるようにという願いを共有し、今後の方針を相談しながらそれぞれの役割を果たすことが大切である。

#### 4 関係機関との連携

問題行動の要因に専門性が必要であったり、学校だけでは対処しきれないような場合は、関係機関が集まり「ケース会議」を定期的に持ち、どの機関が児童生徒のどの部分を支援するかという取り決めをしながら、本人を取り巻く生活環境全般の改善を図るという方法をとる。「ケース会議」のメンバーは問題行動によって構成が若干変わってくる。学校側は校長がリーダーシップを取って指導を進めていくので、校長、教頭、生徒指導主事、学年主任、担任に加え、必要に応じて養護教諭や特別支援教育コーディネーター、部活動の顧問なども関わる。関係諸機関も、教育委員会、医療、福祉、警察などからメンバーが構成される。教育委員会は、指導主事や教員 OB や警察 OB、SC（スクールカウンセラー）、SSW（スクールソーシャルワーカー）で作ったサポートチームを学校に派遣して、早期の問題解決の支援をしたり、教育センターでの教育相談、発達検査などを保護者に提案したりする。当該児童生徒の主治医や学校医・学校薬剤師は投薬や専門医の受診を薦めるなどの判断やアドバイスをする。福祉は、家庭児童相談所や子ども相談所、福祉窓口のケースワーカーなどが保護者の養育を金銭面や精神面などから支える。警察は、少年サポートセンターを窓口に行方不明や犯罪の未然防止や注意、指導、補導に関する相談活動を行う。このように専門性のある各機関が役割分担をしながら、問題行動のある児童生徒の家庭丸ごと支援する体制が取られていくのである。

学校では、児童生徒の指導を終えても、行った指導の効果を検証し、再度指導方法の修正を行い、改善策を検討してよりよい生徒指導を、教職員全体で組織的、継続的に取り組んでいくことが重要である。

#### さいごに

わが子が問題行動を起こしたと聞かされたときに、今までの保護者は、学校側が言わなくても、「先生にご迷惑をおかけしました」「どちらに謝りに行かせていただけたらいいでしょうか」と申し出てくれていたのだが、最近ではそうではない。「学校で起きたことなのだから、学校で解決すべきである」とか「うちの子は何もしていないのに先生に疑われた」と加害者であっても学校が責められる。これではいくら指導をしても問題行動は改善しないし、学校も疲弊してしまう。そのような学校と家庭との関係に陥る前に、十分に信頼関係を築いておくこと、真ん中に子どもを置いて、この子が生き生きと自立した学校生活を送るようにという共通の目標を定めて一緒に取り組みましょうという姿勢を持つことが重要であると痛感する。特に、発達障害があるということは、保護者にとってはなかなか受け止められないことで、「障害」を受け入れないといけないという大きな苦しみが前提となる。このような親の気持ちを理解しないで、まして「親のしつけが悪い」といったような態度で臨めば、信頼関係などかけらもなくなる。一人一人の子どもの障害特性を理解して適切な援助をするなどということは、ほんとうに難しいことで、現場の教員は研修を受けたり、教育相談に訪れたり、本を買い込んだりして常に支援方

法について考えている。それでもなかなかぴったりとはいかないだろう。しかし、うまくいかなくても、「一生懸命どうやってあげたらわかりやすいか支援方法を工夫しています。今回の方法もうまくいきませんでした。また別の方法を来週からやってみます。お母さんもいい方法があったら教えてくださいね。この子のために一緒にがんばっていきましょう。」と声かけをするだけで、支援はうまくいかなくても保護者の信頼を得、保護者も家庭でなるべく叱責せずほめるようにしてくれ、子どもが学校で落ち着いてくるといった効果が見られたりする。発達障害があってもなくても、また虐待があったりそれに近いことがある子どもでも、このような家庭との連携のしかたが、子どもの問題行動を減らすと様々な事例から感じている。ぜひ試していただきたい。

#### 参考文献

- ・ 谷山優子「問題行動の早期発見」林尚示編著『新・教育課程シリーズ生徒指導・進路指導』一藝社,2014
- ・ 岩佐嘉彦・松久眞実『あったか絆づくり―問題行動を防ぐ！ほめ方・しかり方、かかわり方！―』明治図書,2012年.
- ・ 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『生徒指導の役割連携の推進に向けて「生徒指導担当者」に求められる具体的な行動（小学校編）』国立教育政策研究所生徒指導研究センター,平成23年.
- ・ 堺市教育委員会事務局『秩序と活気のある学校づくりガイドライン―静謐な教育環境の確立をめざして―』堺市教育委員会事務局学校教育部,平成23年.
- ・ 文部科学省『生徒指導提要』教育図書,平成22年.
- ・ 文部科学省ホームページ「特別支援教育」平成25年12月10日.確認  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/004/008/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/004/008/001.htm)

## 家庭科教師を目指す人たちへ

家政学部 家政学科  
教授 田 中 陽 子

教職を目指す学生さんには、「教職以外に考えられない。」と言い切る人、「憧れはあるが自分にできるかどうか・・・。」と逡巡する人、様々です。そして、就活解禁日を過ぎると、けっこうな数の人が活動を始めるのも事実です。「教職しかない」と思い定めて突き進める人と、そうでない人の違いは、教職を目指すきっかけを掴んでいるか否かの違いでもあります。4回生で教育実習に行き、ようやく本気になれる人も少なくありません。入学時から教職を目指す人の多くは、中・高等学校での家庭科の先生との出会いを口にしします。言ってみれば恵まれた経験をもつ人たちです。彼女たちはまっすぐ教師を目指します。一方、教育実習をきっかけに本気になった人は、自分にもやれるという幾分かの自信をもって進んでいくことができます。惜しむらくは、教員採用試験の準備は早いほどよく、それが十分に出来ないことです。

子どもの人格と未来を預かる教職の大変さは、他のどんな仕事に比べても引けを取るものではありません。しかし、それ以前に教職に就くまでの大変さも軽視できません。卒業単位をはるかに超える数の教職単位の修得はもちろんのこと、教育実習や難関の教員採用試験の突破など、避けては通れないいくつかの関門が待ち受けています。それは教師という職業の専門性に由来します。採用後、現場に入って能力を磨くことを前提とする職種や職場がある一方、教員の場合は採用時点で一定の資質や力量を備えていることが求められます。そのため、教員養成は大学の教職課程という体系的なカリキュラムによって、時間をかけて行います。ただし、大学が担っているのは、基礎を作ることでしかありません。とりわけ近年では、生徒指導や学級経営等の実践的指導力が重視されていますが、基礎があるかないかの違いは大きく、たとえば、教育実習に行き、生徒との出会いに感動や喜びが実感できるのは、生徒に出会ったとき、獲得した基礎によって、彼らに対する見方や考え方により明瞭な輪郭が与えられるからです。実習校で見たり体験したりしたことによって、大学で学んだ概念や観念に根拠が与えられ、自分なりの教育観や生徒観をもつことが可能になります。基礎のないまま実習に行っても、ひとつひとつの事象の意味がきちんと掴めないまま、ぼんやりとした体験に終わるはずですが、大学で基礎の学習をおろそかにしていると、教育の概念と現場の事象が結びつかず、大学の授業が空疎に感じられるようになるかもしれません。

とは言え、基礎だけで勝負できるほど教師の仕事は軟ではありません。長く教師を続けようと思えば、それなりの備えが必要となります。今、教師を目指している人は、40年後も教師をしていると考えた方がいい。家庭科教師として自信をもって生徒の前に立てるように、専門の知識と技術をきちんと身に付けておくことはもちろん、それらを生徒の生活や興味等に関係づけ、教育内容として構成する知性も持ってほしい。人は置かれている位置と時間を活用しなければならない時があると言います。自立した教師として生徒の前に立つまでにやっておくべきことはたくさんあるはずですが、学生の位置と時間を十分に活用しながら、自分を鍛えてほしいと思います。